



## 慶應義塾大学ビジネス・スクール

# オイルマンの湾岸戦争

### 1 イラク軍のクウェート侵攻

#### 侵攻

1990年8月2日の朝、出光興産クウェート事務所の田代安彦は、東京本社からの電話でたたき起こされた。

時計の針は5時半を指し、真夏の太陽が分厚いカーテンの向こう側で昇りかけている。東京との時差は六時間。仕事柄、時間は不規則だが、こんな早朝の連絡は滅多にない。昨夜はめずらしく零時過ぎまでオフィスにいたので、寝就いてからまだ3時間しか経っていなかった。

電話口の海外部次長の井元明暢（現部長）は、いつもと違って早口だった。

「田代君、ロイター電でイラク軍が侵攻したと言っている。早く国外に脱出しろ」

彼は一瞬で醒めた。

かねてから、国境沿いに集結していたイラク軍が戦車部隊を先頭にクウェートに電撃侵攻したのである。

東京の電話と入れ代わりに、すぐ中東事務所長の和田恒彦からも同じ内容の連絡が入った。アブダビにある出光興産中東事務所はクウェートを始め中東全域を統括している。

（巻末附図1 参照）

田代はまだ半信半疑だった。つい数時間までは何の兆しもなかったからだ。しかし、受話器を置くとすぐに、大砲らしいドーンという音が数分おきに聞こえてきた。

外では、すでに夜明け前のお祈りを終えた人たちが歩いているが、まだ砲撃とは気付いていない様子だ。

「大変だ。早く逃げなくては」

彼は夫人と二人の子供を起こして急いで脱出の準備にかかりさせた。その一方で、日本大

---

このケースは出光興産総務部広報課編「オイルマンの湾岸戦争」（1992年4月）を、同社の好意である許可を得て、一部を省略して編集し、再録したものである。ケースはクラス討議の材料として用いるもので、経営管理の適切あるいは不適切な例を示そうとするものではない。

編集 石田英夫 1992年10月

使館に電話をしたが、まだ早すぎるので誰も出ない。

彼はもっと詳しい情報が聞けるのではと、A石油クウェート事務所のT氏に電話を入れた。クウェートには約400人の日本人が住んでおり、T氏はいざというときの緊急連絡先である。それに、A石油はクウェートとサウジアラビアの旧中立地帯のカフジに原油の出荷施設があるので、陸路脱出の際には心強い。

5

しかし、T氏はまだ状況を知らなかった。

田代が「カフジ方面へ逃げるなら、一緒に行きませんか」と言うと、T氏からは「空港が閉鎖されるかどうか、もう少し様子を見ましょうよ」という返事がかえってきた。

田代は、空路脱出を決めた。万一のために買っておいたアブダビまでのオープンチケットが役に立つかもしれない。運転手のハッサンに電話で家族を空港まで送ってくれるよう依頼した。（巻末附図2参照）

10

イラクから出稼ぎに来ているハッサンは、アラブ訛りの英語を話す。クウェート事務所に15年以上勤務しているベテラン運転手で信頼できる。

田代は、空港で家族と合流することにしてオフィスに向かった。昨日、帰り際に肝心のパスポートの入ったセカンドバッグを置き忘れていたし、それにできるだけ多くの現金を持っている方が脱出に有利だ。

15

出光クウェート事務所は、クウェートシティの真ん中、サファット・タワーの7階にある。シティの東にある彼の住居からは車で10分位の距離だ。

6時ちょうどにオフィスに着いた彼は、金庫から現金と小切手帳を取り出した。バッグを手にして、他に貴重品がないかどうかを見回したが、契約書などの重要書類は本社に送ってあるから確認の必要はない。九谷焼の皿が目についたが、荷物になるだけと思い諦めた。

20

それから中東事務所に電話をして、これから空路で逃げる旨を告げた。ところが受話器を置いたとたん、空港に向かっていたハッサンから、空港が爆撃を受け、既に閉鎖されていることを知らせてきた。緊急時に備え、最近取りつけたばかりの自動車電話が早くも役に立った。

25

空路がダメ、カフジに向かう陸路も様子が分からずかえって危険だ。残るのは海路しかないと、彼はとっさに思いつき、タンカー会社に問い合わせたが、船は出たあとだった。

脱出路を絶たれた彼は、もう一度、中東事務所に連絡をとろうとしたが、今度はなぜか電話が通じない。突然、ドドーンと大きな爆発音があり、彼は身の危険を感じて緊張した。銃撃戦のパチパチという音もかなり近くまで迫ってきた。

30

オフィスの周辺には官庁や警察署があって危険である。東京本社に回線が繋がったので、「クウェートの田代です。空港はもう閉鎖されたようだから、すぐ自宅に返ります」と一方的に告げ電話を切った。

急いでオフィスを出ると、建設中の通信タワーの近くにミサイルが着弾し煙が上がって

35

いた。数人の兵隊が機関銃を手にして立っていたが、発砲する気配はない。

イラク兵かクウェート兵か、よく分からない。愛想よく手を振ると、向こうは不思議そうにこちらを見る。

「イラク兵だ」

途中で手を振るのを止めるわけにもいかず、彼は発砲されないことを祈りながら車のスピードを上げた。 5

彼は家に帰る前に、ガソリンスタンドに寄ることにした。クウェートに赴任してから読んだ緊急時の危機管理マニュアルに「ガソリンを満タンに」とあったのを思い出したのだ。スタンドでは、ちょうどパトカーが給油中だったので、警官に空港の状況を聞くと、少し慌てていたが問題はないと言った。アラブの経験則では、彼らが“ノー・プロブレム”と言う時は既に問題が起きている。しかし、周りでガソリンを入れている人達はまだ何も知らない様子だ。 10

### 戦闘激化

7時過ぎに家に戻った彼は電話をかけまくった。まず、J A L のM氏に空港の被爆と閉鎖を確認した。近所に住む商社マンのA氏とは、これからお互い連絡を密にすることにした。日本大使館へは何度も電話したが、通話中で全く繋がらない。取引先であるK P C（クウェート国営石油）の製品担当者に聞いても戦闘の状況はよく分からない。外では、爆撃と機銃掃射が激しくなってきた。 15

10時半ごろ、ダスマンパレス（王宮）前で激しい砲撃と、銃撃戦が始まった。数台の装甲車が海沿いの道を通過し、数十機のイラク軍ヘリが轟音を立ててマンションの真上をパレスの方向に飛んでいった。 20

田代の家族が住むマンションは、道路を隔ててすぐ前がアメリカ大使館で、パレスにも近い。緑が多く、平時なら結構リッチな環境にあるのだが、こんな時は最悪だ。

彼は窓にソファーを立てかけ、被爆しても破片が飛び散らないように、砲弾が飛んでくるのと反対の部屋の中央に家族を避難させた。 25

10時45分、本社から原油・製品の出荷状況をチェックしてほしいとの依頼が入った。K O T C（クウェート国営タンカー会社）の担当者に確認したところ、設備には損傷がなく、依然出荷を継続しているとの返事であった。

それを本社に報告しようとしたが、どうしても電話が通じない。そこで試しに、自動車電話を使うと今度は一発で繋がった。以後、本社やアブダビへの連絡は自動車電話を使うことになった。 30

11時、本社海外課から連絡が入った。CNNやロイターなどの情報をもとに指示を送ってきたのだ。それは、

1. 外に出ないこと。道で車から引きずり出されている者がいて危険だ

35

2. ラジオの日本語放送を聞くこと
3. カフジ行きも止めたほうが良い  
という内容であった。

その後、ようやく日本大使館と連絡がとれたが、大使館の指示も内容は前記の1、2と同じであった。彼は、先日買ったばかりのラジオを引っぱり出した。しかし、デジタル式チャンネルに慣れていないために、何度もやっても「ラジオジャパン」の周波数に合わせられない。仕方なく、旧式のラジオでB B Cの英語放送を聞くことにした。テレビでは、侵攻についての放送はなく、1日中ジャビル首長やサアド皇太子の肖像を映し、クウェート国歌を流していた。5

パレス付近での戦闘は、一段と激化している模様で、彼は夫人に握飯を作りいつでも移動できる準備をしておくように言った。10

午後12時40分、激しい爆発音があり、部屋が揺れた。隣のマンションにロケット弾が命中したのだ。数分後、同じビルに2発目が命中し、今度は窓枠が落ちた。

「ここにいては危ない」

田代の家族は地下の駐車場へ避難することにした。そこにはすでに、被爆したマンションのすぐ下の階に住んでいるM社のS氏が避難していた。15

砲撃が鎮まったところで、彼はS氏と被害状況を見にいった。隣のマンションからは、王宮の向かい側にあるクウェートタワーがよく見えた。三本の円錐塔のうち、高さ187メートルのメインタワーの中央部には展望台とラウンジがある。クウェートのシンボルとして、多くの観光客が訪れるところだ。そこでは空中戦が派手に展開されたらしく、道路には装甲車が数台炎上しているのが見えた。20

彼は砲弾の飛んできた方向を確認して自分の棟は比較的安全と判断し、地下の駐車場を出ることにした。

マンションの自室に戻って、国際電話にトライしたが、一切通じなくなっていた。ところが、日本のマスコミからは数件の電話がかかってきた。本社広報課で電話番号を聞き、クウェートの状況を教えてくれと言う。25

「情報が欲しいのはこっちのほうだ」と思いながら、彼は見たままに状況を伝えた。間接的にせよ無事にいることを知らせる事になると思ったからだ。

東京やアブダビとの連絡は途絶えたが、なぜかシンガポールからの電話だけは繋がった。たまたまそれが分かったのは、出光インターナショナル・アジア（I I A）にいる、田代と同期の大島周平が心配して電話をかけたからである。大島によれば、田代の「大丈夫だよ」という言葉の語尾は、その内容とは逆にかなり震えており、緊張感がビンビンと伝わってきたという。以後、東京やアブダビとの連絡はシンガポールを中継して行われることになった。

ラジオのアラビア放送を聞いていたハッサンが彼の妹の家から、「イラク軍は市民に危35

害を加えないと発表している」と電話で教えてくれた。しばらくして、戒厳令が占領イラク軍より発動され、午後3時、砲撃、爆撃音が一時的に鎮静化した。

しかし、午後5時、再び砲撃音が聞こえ、サルミア地区のサアド皇太子の邸宅で激しい戦闘が展開された。同時刻（シンガポール時間の夜10時）にI I Aの大島から電話があり、翌朝また連絡をすることで別れた。しかし、次の日にはシンガポールとの回線はもう繋がらなかった。5

午後8時30分、砲弾を受けた隣のビルに住むN社のH家族3名が田代宅に避難してきた。市内はイラク兵で溢れ、掠奪が始まったという噂が飛んだ。テレビは相変わらずサアド皇太子の肖像を映しているから、テレビ局はまだ占領されていないのだろう。

10時半ごろに砲撃、銃撃の音はぴたりと止み、ラジオではイラクがクウェート中央銀行の資産を没収したことを見ていた。10

彼は覚悟を決め、自宅の鍵を確認して寝ることにした。

田代の最初の長い1日がこうして終わった。

#### 各国の反応

イラク軍のクウェート侵攻のニュースは瞬時に報じられ、世界の目は中東の一点に注がれた。

2日午前8時、イラク革命評議会は国営バグダット放送を通じ声明を発表。「若い革命家がクウェート政権を倒した後、暫定的な新しい自由政府の要請でイラクは支援に応じた。事態が落ち着き、暫定自由政府が求めるなら、イラクは直ちに撤退する」と自らの行動を正当化した。20

これに対し、世界各国は一斉にイラクを非難し、国連は緊急安保理を開催、無条件即時撤退を求める決議を採択した。

米国は、ペルシャ湾に空母部隊を急派し、経済制裁としてイラク資産を凍結、経済取引中止を決めた。25

日本政府の対応も早く、坂本官房長官（当時）は記者会見で、「イラクの撤退を要請するとともに事態の推移を見守る」と発表し、外務省は対イラク借款の留保を表明した。

中東の政情不安は、すぐに経済に反映し、ニューヨーク株式市場では55ドル下げ、東京市場では900円余り下落し、ダウ平均3万円を割り込んだ。また有事に弱いとされる円が売られ、一時、前日比2円35銭安の149円となった。30

原油は、市況を表すWTI、ブレント、ドバイの三大銘柄の期近物価格（9月）がいずれも上昇した。WTIは1ドル67セント高の23ドル31セント、ブレントは1ドル58セント高の22ドル15セント、ドバイは1ドル20セント高の19ドル44セントへとね上がった。

原油高、円安は国内の卸売価格を押し上げる要因であり、日銀はインフレに対する警戒感を強めた。35

一方、通産省・資源エネルギー庁は、「石油備蓄が142日分あり、またイラク、クウェートからの輸入が途絶えても、他の産油国からの輸入を増やすことで穴埋めできる。すぐさま原油輸入に支障が出ることではなく、過去の石油ショックのような事態にはならない」と余裕を見せていました。

しかし、わが国は石油の70%を中東に依存し、イラク、クウェートからの原油・製品輸入は全体の約12%，55万バレル／日にのぼっていた。5

こうして、石油元売各社は供給対策を早急に迫られることとなった。

### OPEC総会

イラク軍のクウェート国境付近への展開は多くの外電で報じられていたが、イラクが本気で侵攻するとは誰も思っていなかった。10

クウェートのジャビル首長、サアド皇太子は夜中に飛び起きサウジアラビアに逃れ、エジプトのムバラク大統領は「フセインに欺かれた」と発言した。

クウェート侵攻の直接のきっかけは、イラクとの国境地帯で、世界で十指に入る埋蔵量を有するルメイラ油田の領有問題にあった。しかし、一番の狙いは、対イラン戦で1千億ドルにものぼる借金を抱え込み疲弊したフセイン政権がその苦境を脱することにあったと言われている。15

侵攻の半月前の7月17日、第22回イラク革命記念日の演説でフセイン大統領は、「一部の湾岸諸国が不当に石油価格を引き下げ、イラクに140億ドルの損失をもたらしている」とクウェートとUAEに警告した。20

さらに、翌日書簡が公表され、その中で同大統領はクウェートによるルメイラ油田の盗掘、クウェート、UAEによる石油ダンピング、さらに両国がイラン・イラク戦争における戦争債務帳消しに応じないことを非難した。

そして、原油価格の高値決着を求めて、イラクは3万の軍隊をクウェート国境に集結し、間もなく始まるOPEC総会に軍事的圧力を加えたのである。25

このような状況の下で、7月26, 7の両日、第87回OPEC総会がスイスのジュネーブで開催された。

本会議に先立ち、24日に経済委員会、25日に市場監視委員会が開催された。

総会の前に開かれる経済委員会は、OPECの事務的な問題を処理するもので、市場監視委員会は価格動向や生産・需給動向を監視するためのものである。市場監視委員会は、13カ国の大蔵大臣が参加して、25日午後5時から開催され、事務局から需要見通しや過剰在庫の解消見通しなどの報告があり、1時間足らずで終わった。30

本会議（総会）は、翌26日午前10時半過ぎから開催された。ここでは価格と生産枠について討議され、イラクは最低参考価格をバレル25ドル、UAEの生産枠を150万バレル／日に引き上げ、他の国については最低参考価格が25ドルになるまで生産枠を据え置くこと35

を主張し、ジェッダ合意（90年7月、湾岸5ヵ国が参加）の18ドルとの調整をどうするかが焦点となった。

現状の生産能力が限界に近いイラクとイランが価格重視派、生産余力があるサウジアラビア、クウェート、U A Eが増産派に回り、そのサウジが調停役となる構図である。

総会には、世界から数百人が取材に集まり、事務局から記者章が渡される。日本人記者は毎年10人程度で、そのうち企業関係者は2、3人。出光以外は商社である。今回のO P E C総会には、出光からクウェート事務所の田代と本社・海外部情報班の今田一雅ら3人が行っていた。5

田代らがジュネーブ入りした24日、現地ではイラクがクウェートとの国境に軍隊を配置したとの「ワシントンポスト」のニュースが大きな話題となっていた。10

田代は、総会の始まる前日、イラク高官を取材して、その時「大統領が25ドルと言っており、20ドルでは不十分だ。しかし、25ドルを大きく下回らなければアクセプトできるだろう」というコメントを得ていた。

同高官はまた、イラク軍がクウェート国境に集結することに関しては、「あくまでプロパガンダで、それ以上の心配はない」と言明した。15

さて、最低参照価格の引き上げについては、本会議前でありながら既に、最低ラインとしてバレル20ドルというコンセンサスが出来上がっていた。そして、25ドルへ引き上げを主張するイラクとの隔たりをいかに埋めるかが、今後総会の最大のポイントになると思われた。

田代らは、本会議を目前にした各国代表の表情をこうレポートした。20

「サウジのナーゼル石油相をはじめ、イラクのチャラビ石油相、イランのアガザデ石油相は非常に上機嫌で、特にアガザデ石油相は価格引き上げで喜びを隠しきれない様子でした。これに反し、クウェートのアミーリ石油相は終始顔色が冴えず…」

イラクにプレッシャーをかけられたクウェートの立場がよく表れている。イラクの軍事的威嚇が効果を発揮したものといえよう。25

さて、本会議は、イラクの強硬な姿勢で紛糾し結論には至らなかった。翌27日は、10時から予定されていた全体総会は開かれず、前日夜にU A Eが提出した22ドルの妥協案を中心に、サウジアラビア、イラン、イラク、クウェート、U A Eの5ヵ国の個別会談で調整が行われた。しかし、22ドルでは、サウジが需要増加を著しく阻害すると難色を示し、午後に入ってからも個別折衝が続いた。30

最終的にはサウジアラビアのファハド国王とフセイン大統領の間で政治決断を受けることになり、結局、21ドルの線で合意に達したのである。そして、4時から全体総会が開かれ、その後コミュニケが発表され、総会は異例の早さで閉会した。

コミュニケの主な内容は、最低参考価格（O P E Cバスケット）を、バレル18ドルから21ドルに、生産枠に関してU A Eのみ40万5千バレル／日の増枠を認め、他の12ヵ国は8935

年11月の合意のままとする。監視体制は新たに2つの小委員会を作り、生産と石油需給を厳しく監視する、というものであった。

イラクがクウェートに突き付けたダンピング問題はこれで解決した。残る盗掘補償と戦争債務の帳消し要求の2つの政治問題については、サウジアラビアの仲介で、7月31日、サウジのジェッダでイラクとクウェートの直接交渉が持たれることになった。

5

### 交渉決裂

OPEC総会の開催中、クウェート事務所には中東事務所から中澤啓介が応援に来ていた。中東には、出光の事務所がアブダビ、クウェート、ジェッダ、テヘランの4ヵ所があり、どこかが手薄になった時はお互い協力し合う態勢ができている。

10

クウェート事務所は、所長の坪井明と田代、それに現地スタッフ2名の小所帯である。坪井は7月中旬から1ヵ月間の保養休暇でヨーロッパに出掛けていた。本来、2人が同時に外へ出ることはないとだが、田代の出張が急きょ決まったのだ。

中澤は通常業務のかたわら、緊急時対策に取り掛かった。イラクの軍事的圧力が予想以上に強いと判断した中東事務所の和田所長から指示があったからだ。

15

中澤はまず、田代の家族用の航空券（アブダビ行きのオープンチケット）や水、非常食を手配した。しかし、危機意識を反映して、スーパーマーケットはすでに品薄で、オフィス用の非常食としてはカップ麺しか手に入らなかった。

7月28日、田代がOPECの取材から戻ると、中澤もアブダビに帰った。イラク軍は、まだ国境に展開しているが、アラブが同じアラブを本気で攻めるはずがないという見方がいぜん支配的だった。田代も、OPEC総会の開催中、イラク高官に再三にわたって侵攻の意図がないことを確認していたので安心していた。

現地の英字新聞の見出しには、大きく「イツツ・オーバー」（終わった）と出て緊張はすっかりなくなり、しこたま買い込んだカップ麺も食べ始めていた。

7月31日、サウジアラビアのジェッダでイラク革命評議会のイブラヒム副議長とクウェートのサアド皇太子等による直接首脳会談が行われた。しかし、交渉は決裂し、後日に再交渉かとの観測が流れた。

25

翌8月1日、外電記者から「イラク軍10万が国境に集結しているらしい」という情報が入った。米国大使館のS参事官に侵攻の可能性を聞いたところ、「10万は大袈裟であり、アラブ同士で侵攻・攻撃はない」という従来と同じ見方であった。日本大使館も同様の見方をしており、彼はそれを本社に報告した。

30

しかし、イラクはクウェートを侵攻した。侵攻後に発行された石油業界紙「M E E S」によると、クウェート側は交渉の席上、戦争債務の帳消しと、イラクが主張する油田盗掘損害24億ドルの半額補償を申し出たと報じている。

## 2 大使館での避難生活

### 移動

侵攻から一夜明けた8月3日。イラク軍は、クウェート全土をほぼ制圧したが、まだクウェート兵による抵抗が散発的に続いていた。（巻末附図2参照）5

朝4時半頃、ドーンという鈍い音とともに砲撃が再開された。6時20分、田代のマンションの近くで物凄い爆発音があった。慌てて窓から覗くと、近くを走るガルフストリート（湾岸道路）にロケット弾が落ち、もくもくと煙が立ち昇っていた。ガルフストリートには、100メートルおきにイラク軍戦車が並び、反攻・上陸に備えて砲身を海に向けていた。

国際電話は、すでに前日の夜からほとんど通じなくなっていた。彼は、現地に住む日本人や取引先と電話で活発に情報を交換した。10

その結果、市内の官庁街を除けば、検問は受けるが外出可能なことやファーストリングの中は戒厳令で入れないことが分かった。クウェートシティには、ダスマンパレスを中心に7本の環状道路が走っている。ファーストリングは、そのうちの一本で、パレスに一番近い。15

正午ごろ、田代は隣のマンションに住むM社のS氏と恐る恐る近所の様子を探った。彼の住居からは、米国大使館やクウェート・インターナショナルホテル（旧ヒルトンホテル）などが近い。ホテルの駐車場入口の料金所は、機銃掃射で穴だらけになって金庫が破られていた。S氏のマンションからはダスマンパレスの状況がよく見え、すでに戦闘は止んでいた。20

田代たちの一番の心配は食料だった。そこで彼らは、外出しても危険が及ばないと判断して、買い出しに出掛けることにした。情報では、サルミア地区にある「スルタンセンター」がオープンしているらしい。この店は、クウェートには珍しいエスカレーターのある、24時間営業の巨大スーパーだ。田代のところからは、車で20分程の距離にある。

すでに道路には一般的な乗用車が結構走っていて、予想していた検問にもあわなかった。25  
スーパーは、イラク軍の指示で平常通り営業しており、値段も上げぬよう命令されていた。昼過ぎ、彼らが着いたときにはすでに米やスペゲティなどの主食類は店頭から消えていたが、肉類や日本食のタクワンなどは豊富に残っていた。

午後1時半、無事帰宅。外は摂氏50°を超す暑さで、クーラーの電源や水が止められはしないかと心配だった。田代は炊飯の燃料だけでも確保しておこうと、日頃から親しくしているインド人の雑貨屋に無理を言って、LPGガスのボンベを満タンにしてもらった。30

夜7時半、テレビで暫定政権が誕生したという発表があった。しかし、旧ヒルトンホテルに滞在しているM社のT氏の話では、翌4日の朝3時から7時の間に米国が攻撃するらしいので、米国大使館周辺は最も危険だという。さらに、ガルフストリートでN社の人がパスポートを取られたとか、S社の人が自宅で入浴中にイラク兵の点検を受けたという情35

報が伝わり、日本人住民の危機感は頂点に達した。再三にたる住民の保護要請によって、日本大使館は夜の9時半になって迎えの車を出した。田代の家族をはじめ、米国大使館付近の住民のほとんどは、外交官車を先頭に約10台の車でコンボイを組み、15分程の距離を大使館へ避難した。

大使館には、すでに日本人旅行者や別の地域に住む日本人家族が何組か避難していた。  
大使館の地下にはダンスパーティができるほどの大きなホールがある。そこを絨毯やダンボールで区分けして寝ることになった。こうして、避難家族の共同生活が始まった。

### 原油の緊急調達

本社海外部と中東事務所では、田代の家族の安否を気遣いつつ、8、9月分の原油の確保が緊急の課題となつた。

イラクの原油・製品の輸出量は270万バレル／日、クウェートは140万バレル／日。これだけの石油が、侵攻に伴う経済制裁によって、市場から姿を消すと予想された。また、日本が両国から輸入した原油は、平成元年度実績で約40万バレル／日、全輸入量の11%を占めていた。

東京との時差はアブダビで5時間、クウェートとは6時間ある。海外部原油課の滝口英彦は、侵攻のニュースを聞くとすぐに中東事務所と連絡をとり、まずペルシャ湾内にいる出光のタンカーの運航状況を確認した。幸いクウェートの原油を積んだタンカー「アンブラホエーラ（23万重量トン）」は、侵攻直前に港を離れていた。このタンカーは田代が一時海路での脱出を考えた船だ。

次に滝口は、当面スポットで手当てしなければならない原油の量を割り出した。8月は月末までにイラク180万バレル、クウェート90万バレルを予定していた。これは、大型タンカー（V L C C）の一杯半に相当する量だ。8月の配船はすでに終わっており、オペレーションに穴をあけるわけにはいかない。

滝口の連絡をもとに、中東事務所の宮田順次は、アラブ首長国連邦（U A E）のアブダビ国営石油会社A D N O Cと交渉に入った。すでに、中東事務所の和田所長は海外部長の出光昭（現出光石油開発社長）から指示をうけ、A D N O Cの高官をはじめ各産油国の要人に対し協力を要請していた。A D N O Cはターム契約を結んでいる出光の増量の申し出に快く応じてくれた。

しかし、U A Eの増量だけでは、不足分をカバーするには到底足りず、翌3日、再び滝口は中東事務所に電話を入れた。「9月積みV L C C 1ぱい分をイランと交渉してくれ」イランはクウェート事務所の管轄だが、田代はとても商売の話などできる状態ではない。所長の坪井は、夏期休暇中で連絡がとれず、イランとの交渉は中東事務所の和田と中澤が代行することになった。

3日は金曜日、イランの国営石油会社N I O Cは休みだ。そこで中澤は、N I O Cの担

5

15

20

25

30

35

当者の自宅へ電話を入れた。イランへの電話は、普段でもなかなかつながらない。担当者を捕まえるのに時間がかかったが、交渉はすんなりとまとまった。しかし、翌4日の土曜日、東京からまた連絡が入った。

「8月にV L C C をもう1ぱい手当したい」

中澤は、直ちに再度N I O Cとネゴに入ったが、今度は他からも買いが殺到していて、難航した。1回目の交渉と違い、今度はプレミアムが上乗せされている。「それは飲めない」「いや、飲んで欲しい」といったやり取りが何度かあって、なんとか契約にこぎつけた。こうして、8月分と9月分の供給が確保された。

このときイランは、欧州向けに売れば高く売れるかなりの量の原油を、日本に振り向けている。

5

この2、3日後に通産省は、石油会社や商社に対し原油の高値買いをしないように指導した。もちろん、出光は高騰したスポット原油には、一切、手を出していない。

もっとも原油課の真武伸行は、「現行の原油価格の決定方式からすると、高値買いをするなと言っても、何をもって高値買いとうのかは難しいんですよ」と言う。

アラビアンライトなど主要な原油価格は、「プラツツオイルグラム」に毎日発表されるスポット価格の月平均価格を基準に、一定の計算式によって決定される。従って、積み月が終了した時点でないと価格は決定しない。つまり、買った時点では、高値買いかどうか判断出来ないのである。

15

中東事務所の和田は、今回の原油の緊急調達について、産油国の協力に感謝しながら次のように述懐している。「高値買よりも、むしろ一番恐ろしいのは狼狽買なんです。これを防がないと価格が跳ね上がってしまいます。幸い今回はそれがなかった。出光の場合は、U A E やイランが素早く対応してくれましたし、サウジアラビアも契約量の倍増に応じてくれたので助かったんですよ」。

20

日頃の付き合いが産油国の協力という形になって表れたのだ。

25

### 産油国とのパートナーシップ

メジャーと提携関係にない出光は、1970年代から中東産油国との関係強化を図ってきた。ここで、中東における出光の活動を振り返ってみよう。

1953年（昭和28年）、出光はメジャーの反対を押し切ってイランから石油を輸入した。この「日章丸事件」が、出光を中東に係わらせた最初の出来事だ。

30

その後、60年代、出光はメジャー、とくにガルフから原油供給を受けていたが、70年代に入ると、産油国の主権回復によってメジャーの供給力が急激に失われていく。出光は、次第にメジャーから供給を受けづらい環境に追い込まれていったのだ。

そうなれば、自ら中東に出ていくほか術はなく、1972年から産油国との直接交渉を開始した。

35

翌73年、出光は地中海に面したレバノンのベイルートに、中東で最初の事務所（75年閉鎖）を構えた。当時、中東の玄関口であったベイルートには、産油国に関するあらゆる情報が集まっていた。この地を足掛かりに、その後、イランのテヘラン事務所（73年開所）、クウェート事務所（74年開所）サウジアラビア・リヤド事務所（74年開所、80年閉鎖）、アブダビ事務所（75年開所、85年中東事務所に改称）、サウジアラビア・ダーラン事務所（80年開所、86年閉鎖）と次々に開設し、中東産油国への布石を打っていった。  
5

当時は、産油国へ行っても、出光のことなどまだ誰も知らない。これまで直接コンタクトしていなかったのだから当然のことで、とにかく70年代は、産油国との結びつきを求めてガムシャラに走り回った時代であった。

しかし、80年代に入ると、出光の名前も徐々に知られ、安定供給にかける出光の姿勢がビジネスを通じて産油国に理解されてきた。D D（直接取引）契約を主体に、産油国と安定した取引を行うことで信用を勝ちえたのだ。  
10

そして90年代、産油国との今後の関係について、和田はこう語る。

「これからは、産油国との共同事業等に力を入れて、眞のパートナーシップを築いていく時代だと思う。産油国における日本の存在価値をさらに高めていけば、原油は自然に日本に流れてくるようになる。中東で政権がどう変わろうと、産油国との関係は変わらない。原油を買いたいとか買ってくれといった単純な関係から、一步踏み出すことが必要だ」  
15

1990年6月、出光は新たにサウジアラビアのジェッダにも事務所を開設した。ここでは、原油、製品、L P Gの購入と潤滑油の販売を行っている。

そのサウジアラビアは、イラク軍の侵攻直後、日本が不足する原油の量を出光をはじめ各社に聞いてきた。彼らは日本市場を極めて大切に考えている。  
20

メジャーやO P E Cが勢力争いを続けてきた石油の歴史から、これからは産油国と消費国が協力して、安定したマーケットを作っていく時代に入ったのだ。

## 退避勧奨

25

8月3日、クウェートに暫定政権を樹立したイラク軍はさらに南部のサウジアラビア国境に軍隊を集結。湾岸は新たな緊張に包まれた。

米国やE C諸国と歩調を合わせ、日本政府も5日、石油禁輸など4項目からなる対イラク経済制裁を決定した。イラクにとって大きな誤算は、ソ連まで非難する側に回ったことだろう。  
30

イラク側は、撤退をほのめかす一方で、6日、クウェートにいる外国人のうち米、英、西独人をバクダッドに連行した。米国の攻撃に備えての人質確保が目的だったといわれている。

アラブ諸国はあくまでアラブ内での解決を目指していた。しかし、イラクの攻撃の脅威に晒されていたサウジアラビアは7日、国境防衛のため米軍を中心とする多国籍軍の駐留  
35

を了承し、それと同時に西側諸国の要求に応じ、200万バレル／日の増産を決定した。

翌8日、米国は、空挺部隊を中心とした数千人規模の陸上兵力の派兵を決め、さらにエジプトへも派兵を求めた。

同日、イラクがクウェート併合を宣言し、湾岸地域の緊張は一段と高まった。国連安保理は、即座にこれを無効とする決議を行い、アラブ諸国を含め世界はイラクの一方的な宣言を一斉に非難した。  
5

中東の大國エジプトのムバラク大統領は、米国が要請する多国籍軍への参加は拒否したが、アラブ合同軍への参加を表明し、域内解決に向けてアラブ諸国の協調を強く呼びかけた。

クウェートのサウジアラビア国境には17万のイラク軍が集結し、一方、多国籍軍には英國やカナダなどがサウジ派兵を決め、米国は5万人の兵力増強を表明していた。  
10

こうして、湾岸危機は次から次へと瞬く間にエスカレートしていった。

ところで、イラクが保有しているミサイルのうち、最も航続距離のあるアル・アバスの到達範囲は850キロメートルと言われていた。これだと、ミサイル基地があるとされるイラクのバースラからUAEの西部まで十分に届いてしまう。  
15

中東事務所では、危険に備えてすでに全員の避難準備ができていた。休暇でヨーロッパを旅行していたクウェート事務所の坪井も、急ぎアブダビに戻っていた。ちなみに、中東では50度近い夏の猛暑を避けるため、長期に保養休暇をとることが一般的だ。彼のようにたまたま休暇をとっていたため、人質になることを免れた日本人は多い。

9日、中東事務所は避難することを決めた。その3、4時間後、日本外務省はサウジアラビアやUAE、イラク、バーレン、カタールに滞在する日本人に出国を勧奨した。  
20

翌10日、中東事務所とジェッダ事務所のメンバーは、全員家族とともに帰国した。彼らにとって、クウェートで危険に晒されている田代の家族を残していくことは、正に断腸の思いであった。

### 大使館での避難生活

クウェートの日本大使館に避難してきた日本人は、大使館員の家族を含めて、8月3日時点の57人から5日には270人に膨れ上がった。当時、約400人の在留邦人のうち3分の1は夏の休暇でクウェートを離れていたので、残りのほとんどの人が大使館に避難したことになる。  
30

田代たちは大使館に行ってからも、しばらくは机を引きずる音やドアが閉まる音が全部爆弾の音に聞こえて仕方なかった。

こうして大使館地下で耐乏の共同生活が始まったが、これだけ大人数となると、統制をとるのも大変なことだ。そこで全体を15班に分けて、食料調達班、脱出検討班、電気担当、水担当、炊事担当、医療担当、消防安全担当、娯楽担当などのグループを決めた。S商事  
35

のH所長が全班の統括リーダーとなり、田代は第2班家族持ちグループのリーダー兼場所割り責任者となつた。

差し当たつての問題は食料の確保だった。大使館には食料のストックがなく、それぞれの手持ちを供出したが、1日に1人即席メンとおにぎり2個と計算して、10日分の食料しかなかった。その後、クウェート市内にあるレストラン「慶」が郊外の倉庫に保管していた米や野菜類、肉類を調達できたため、少なくとも1ヶ月は持ちこたえられる状況となつた。しかし、冷凍庫がないため肉類はもたず、食事は1日2回、それも拳大のご飯に僅かなおかずの日々が続いた。食器などは当然なく、カップメンの容器を洗いながら3、4日使うという状況だった。

プロのコックが3人おり、その下に男女が7、8人ついて炊事を担当した。電気ガマが10台集められ、ヒューズが飛ばないように配電盤をチェックしながらの炊飯だった。

困ったのは風呂とトイレだ。シャワーは男性は3日に1回と決め、トイレはバケツの水で流すなどして対応した。

買い出しは男の仕事で、流れ弾や検問、交通事故に注意しながら開いている店を見つけ、食料や雑貨を仕入れた。仕入れのお金は、大人一人につき10KD（クウェートディナール、15約5千円）を2回集めた。

クウェート事務所のイラク人運転手ハッサンがしばしば大使館に面会に来て、食料の買い出しや燃料の確保を手伝い、いろいろな情報を提供してくれた。田代は、彼と一緒に何度も街に出た。

「イラク人に対するテロがあるからバスラに帰ったらどうか」と、田代は再三勧めたが、彼は「田代、おまえがクウェートにいるうちは手伝うよ」と残ることを決めていた。他企業のローカルスタッフの中には、ハッサンに啓発され同じような活動をする者が相次いだ。

ある時、一人で市の中心部に入ったハッサンはホテルの前で兵隊がクレーンで吊るされているのを目撃してきた。イラク軍の将校で、死体の前には「略奪の罪によって処刑」と書かれていたという。当初、イラク軍の略奪が多かった市内の治安は、この時期を境に徐々に回復していった。それでも、外出する時は、安全を考え、必ず何人か組になって行動することにしていた。

### 避難していた米国大使館員

田代は、大使館に避難した日の翌朝、館内で思いがけない人に会った。駐クウェート米国大使館のS参事官である。彼は、侵攻の前日、田代がイラク軍の動向を聞いたところ、「アラブ同士で戦いはない」と答えた人物で、田代は情勢分析のため、再度8月4日の10時に米国大使館でS氏と会う約束をしていた。

田代が「約束通り会えたね」とジョーク交じりに挨拶すると、彼は「自分が米国大使館員であることは、絶対に秘密にしてほしい」と真顔で言う。2日の昼から日本大使館に避

難しているとのことで、彼の他にも米国外交官やその家族16人がいた。

ダスマンパレスや田代の住居からも近い米国大使館周辺は、イラク軍の侵攻とともに激しい銃撃戦に巻き込まれた。大使館はイラク軍に包囲され、家族を連れに自宅に行った大使館員の一部が戻れなくなり、比較的平穏な日本大使館に保護を求めたのだ。

日本大使館は、人道上の見地から彼らを地下室に収容した。しかし、米国人をかくまつたことがイラク軍に知れると、日本大使館や日本人にも危険が及びかねない。田代たちはこのことについて、解放後も一切沈黙を守った。（この事実は、停戦後の3月8日付朝日新聞のインタビューで、駐クウェート臨時代理大使が公にした）

避難してきた米国人は、田代たちとは別室で生活していたが、中に三人の子供がいて、昼間は日本人の子供たちと仲良く遊んでいた。

米国外交官らは、8月13日にイラク軍の警備が緩んだ隙を見て、数台の乗用車に分乗して米国大使館に戻った。その後、田代はS参事官たちが砂漠ルートで脱出したという噂を聞いた。

米国外交官の保護は国際信義の上で当然の行為である。しかし日本大使館が、すでに彼らを保護していたにも拘らず、一方では米国大使館付近の日本人の保護要請をなかなか受け入れなかつたことを問題視する声も多い。

ともあれ8月23日、ベーカー米国務長官から中山外相（当時）宛に、日本大使館の勇気ある行動に対し、深い感謝の意を述べた書簡が届いた。

### 3 クウェートからイラクへ

#### バグダッド移送

クウェート併合を宣言したイラクは、翌9日、各国大使館に2週間以内に首都バグダッドへ移るよう指示してきた。日本政府は当然これを拒否し、大使館も「2週間の期限後も機能は停止しない。ここへの侵入は宣戦布告と同じで有り得ない」と言っていた。

その一方で、田代たち大使館に避難していた民間人は、クウェートからの脱出を考えていた。まず空路脱出が有望との大使館の情報をもとに、具体的な脱出計画が検討された。しかし、空港へ行くための車53台の確保や移動方法、飛行機に乗る順番まで決められたこの計画は、実行間際に突如中止された。クウェート空港の使用許可を取るにあたって、誰と交渉して誰からもらえばよいのか、結局分からなかったのだ。

また、クウェートとイラクとの国境が8月9日に開放され、ヨルダンへ陸路で脱出できるという情報がハッサンから入った。田代は自分たち家族だけでもトライしたいと大使館に告げたが、「単独では行動しないで欲しい」と戒められた。

しかし、この脱出ルートがすぐに検討されていれば、8月14日になってイラク・ヨルダン国境で日本人は通さないという方針が出る前に脱出が可能だったかも知れなかった。

脱出に関する方針は常に後手にまわった。脱出ルートの検討やガソリンの手配などの具体的な詰めは、とても大使館では手が回らず、連日民間人ベースで脱出計画が練り続けられた。

そういうしているうちに20日、イラク側は改めて「24日までに大使館を閉鎖するように」と指示してきた。その翌日、中山外相から「クウェートではもう保護できないので、イラクに行くように」という勧告が出され、大使館内の邦人に動搖が走った。その日の深夜に200人分の飛行機の座席が用意されたが、日本人の多くは、食料不足やクーデターが心配なイラクへ行くのを恐れ、大使館の無電を使って、「イラクへ行くのは命令か」と本社に問い合わせていた。

しかし、田代は、会社の指示を仰がず、あくまで本人の意思でイラクに行くことにした。

その決断の背景には、「戦場になる可能性はクウェートのほうが高いし、サウジアラビア側に脱出ルートはない。それにイラクには知人もいる」という、彼なりの分析があった。それに、「家族の命がかかっている。例え死んでも自分の決断ならば納得がいく」と考えたからだ。現地では、M社が田代の家族の面倒をみてくれることになっていた。

結局、田代の家族をはじめ70人が第一陣として乗り込むことになった。22日の夜明け前、田代はスーツケースに子供用の羽根布団やラジオ、ビスケットなどの食料、水筒をつめて脱出の用意をした。カメラはスパイ容疑がかかるので置いていくことにした。

クウェート空港でかなり待たされた後、飛行機は無事にイラクへ向かって離陸した。機内で簡単なパンの食事が出され、これで皆が落ち着いた。

飛行機は、1時間半でバグダッドに到着した。サダメ国際空港には田代も面識のある片倉在イラク大使が出迎えていた。

大使は「もう大丈夫」と笑顔で話しかけ、一行もようやくクウェートから脱出できたことを実感した。

田代たちは一行は、イラク側が用意した3台のバスに分乗した。先頭のバスには片倉大使が乗り、田代家族が乗った最後尾のバスにも他の大使館員が付いた。大使館員からイラクの平穏な状況が伝えられると、クウェートから脱出してきた人たちの緊張はほぐれ、涙を流して喜ぶ姿も見られた。

バスはクーラーがよく効いて、窓の簾は日差しを遮り快適だった。しかし、その簾が日除けのためではなく、目隠しであるとは、そのとき誰も気がつかなかった。

## ホテルに軟禁

田代たちを乗せたバスは、空港から、市内のマンスールメリヤホテルの前に横づけされた。

大使館員がイラク側と何やらもめていた。一旦おろした荷物をまた戻したり、田代たちはバスの中で長い間待たされた。

35

田代は、まず大使館に行きそこで名前等を登録してから、宿泊先のホテルへ行くと聞いていたので、予定が変わって、ホテルの予約で手間取っているのかぐらいに考えていた。一時間以上たってから、大使館員からここで登録するからと説明があり、ようやくバスを降りることができた。

荷物をロビーに置いて2階に上がると、ボールルーム（大広間）にビュッフェスタイルの食事が用意されていた。クウェートの大天使館では耐乏生活を強いられていたから、全員、目の前の豊かな食事に夢中となつた。5

片倉大使以下の大使館員もリラックスして、イラク側と話をしたり、各テーブルを回り、皆を慰労していた。

田代が事態の真相を知ったのは食後の歓談が少し長いなと感じ始めたときだった。イラク高官と話していた片倉大使の様子が突然、真剣になり、顔色が真っ青に変わった。大使は本国に連絡するために部屋を去り、残った大使館員がさかんにイラク側とやり合っている。子供を連れてトイレに行った田代夫人が、帰ってくるなり「私たち、監視されているみたいよ」と小声で言う。10

田代たちは、全員の名前、仕事、パスポート番号などを紙に書かせられた。コーヒーは出ないのかと催促していた人たちも、ただならぬ気配を察知したようだった。15

しばらくして、イラク側は大使館員に外に出るように命令してきた。

大使館員は田代たちに、「我々が予定していたパレスチントンホテルと違いますが、今日はここに泊まって下さい。イギリス人もおり、待遇は良いようですから安心して下さい。我々はいったん出ますが、皆さんとはまたコンタクトします。大使館の電話番号をひかえて下さい」と、状況を説明した。20

「電話は外部に通じるのですか」と田代は聞いた。

「多分通じないでしょう」との返答に、一同騒然となった。

「これは軟禁ですね」

「そうです」25

大使館員の顔は苦渋にあふれていた。

「せめて、女性と子供だけでも大使公邸に避難させてくれないか」と、田代は懇願した。

大使館員は、直ちにイラク側と交渉してくれたが、全く相手にされず、追われるよう部屋を出されてしまった。

別れ際、皆が「あとの人が来ないようにちゃんと連絡してくれ」と言うと、「既にそうしています」との答えだった。30

その後、取り残された田代たちにホテルの8階から10階の部屋が割り当てられた。田代の家族には1部屋が当たがわされた。部屋の電話は、外部と連絡ができないよう取り除かれており、各階には屈強な見張りが立って、彼らは片手を新聞紙で巻き、ピストルを隠し持っていた。35

翌23日、田代たちが固いパンとコーヒーの朝食を取っているときに、昨晩遅く、13人の日本人が第二陣としてホテルに来ていたことが分かった。在クウェート外国公館の閉鎖期限を前に、イラク軍が各国大使館を包囲し始めたため、クウェートを出ざるを得なかったのだ。バグダッドに着いた彼らは、空港でいきなりイラク兵に銃を突きつけられ、ホテルに連行されたという。中には妊婦もいた。

5

そして、昼過ぎになると、第三陣、第四陣が到着した。

田代たちは、ホテルにいるイギリス人が、4日おきぐらいに製油所や兵器工場を転々とさせられているのを知った。大きな不安が彼らを襲った。

### 軍事施設への移動

10

8月23日、イラクの通告した在クウェート大使館の閉鎖期限（24日正午）が直前に迫った。この日までにクウェートから移送後、バグダッド市内のホテルに軟禁された邦人は23人を数えた。

緊張感の高まりはただちに経済面に反映し、原油価格が欧米で30ドル台に高騰。日米で株価が暴落し、NTT株が初めて90万円を割り込んだ。

15

この日、すでにホテルで軟禁状態にあった田代は、昼食中の監視人の中にイラク国営石油公社（SOMO）のS氏を見た。S氏とは旧知の間柄で、彼は「お前を捜していたんだ。何かできるか、金は大丈夫か」と田代の身を案じてくれた。

「すぐに日本へ帰れるか」と田代が聞くと、S氏は困った顔をして「それは難しい」と答えた。

20

翌24日の午前中、田代たちはプールで泳ぐことを許されるほどの“ゲスト”待遇だったが、午後になり日本の自衛隊派遣に関するニュースが伝わると、イラク側は対応を急変し、「日本人も欧米人と同じように、責任をシェアしてもらう」と言い出した。

わが国政府は、欧米に歩調を合わせる必要から、中東支援策のまとめに入っており、国際緊急援助隊派遣法の改正や自衛官の派遣がさかんに論議されていた。また、その一方では、支援策がイラクを刺激し、邦人保護の障害になることが懸念され、政府も苦しい板挟みの状態にあった。

夜になって、イラク側は“ゲスト”的なパスポートを没収し、さらに、軍事施設などに分散するため班分けを命じてきた。家族持ちグループ、単身の男性15人のグループ、10人のグループなど、全部で16班とする細かい指示があった。

30

田代家族だけは、一家族一グループとされ、移送時刻を25日夜9時、バグダッドから45分くらいのところという説明が例外的についていた。田代夫人が、日本人と離れてしまうことに非常に不安を感じていたところ、A石油のT所長が「出光はイラクからずっと石油を買っているから、大丈夫だよ。他に日本人がいないのは不安だろうが、先に出してくれる可能性もあるから」と励ましてくれた。

35

sample

sample

sample

sample

sample

翌25日、国連安保理が限定的武力行使を容認する決議を採択した。これに対抗するかのように、午前中から各グループは、バスで軍事施設やダム、製油所、化学兵器工場へ、米軍の攻撃に対する“人間の楯”として移送されていった。昼頃、片倉イラク大使がホテル前でこの動きをキャッチしたころは、すでに大半が移送された後だった。

夜9時、いよいよ田代の番が回ってきた。田代夫婦と二人の子供は、カーテン付きの大型バスに乗せられた。バスには田代家族だけで、5人の監視人が同乗した。行き先などは一切告げられなかったが、どうやらイラク南部のほうへ向かっているようだった。

バスは2ヵ所のチェックポイントを通った。最初のポイントで、7歳になる長男がバスのカーテンをそっと上げ、「フセイン大統領の大きな看板がある」と田代に告げた。やがて、目的地へ着いたが、そこは建築現場のバラックのようなところだった。田代はバビロンへ行く途中のドーラあたりの軍事施設の一部だろうと推測した。

田代夫人は、もしかしたら空港から出られるかもしれないという淡い期待もあったので落胆した。クウェートからバグダッドに移る時は、それからすぐに日本へ帰れるはずだったのだから無理もなかった。田代は、「大丈夫だよ」と言って慰めるのがやっとだった。

### “ゲステージ”の生活

監視人に導かれバラックの入口を入ると、10メートル四方の庭があり、その先に3棟のプレハブハウスが建っていた。各ハウスには部屋が3つあり、1つは食堂になっていた。そこで監視人が、すでに人質としてクウェートから連れて来られていた人たちを田代に紹介した。クウェート軍に戦車の操縦を教育していたという英國軍人の2家族、英國人の神父夫婦と新婚カップルなど、田代の家族を含めて18人がここに収容されていた。

この新婚カップルは、なんと田代が来る2日前にここで神父の立会いのもと結婚式を挙げていた。このとき、監視のイラク人が新郎新婦のスーツやウェディングドレスを用意し、式の写真も撮り、後日、ひき延ばして夫婦にプレゼントしてくれたという。緊張が続く日々、こんなほのぼのとした話もあったのだ。

人質の生活は、快適とは程遠いものの一応は保証されており、イラク国内の一般の生活から見ると“優遇”といってもよかった。

日に3回の食事は、朝がパンと紅茶、昼と夜がトマト、キューリ、薄い肉のフライ、油炒めライスで、量的には不足しなかったが、単調で脂っこいメニューには閉口した。家族全員が胃をやられ、下痢が続いた。

別棟にバラックのトイレが3つあり、ハエや虫に悩まされた。風呂はなく、その代わり簡単なシャワーが1個ついていた。寝室には、旧式のクーラーがついていたが、壁の隙間から虫が侵入し、朝起きると刺された顔や体が腫れ上がっていた。

各部屋の窓には、すべて鍵がかけられ、庭の出入口にも外から鍵がかけられていた。

娯楽は、テレビとイラクで発行される英字新聞のほか、毎日、夕方から近くの屋外プー

5

10

15

20

25

30

35

ルカスポーツセンターまで目隠しのマイクロバスで行き、運動が許された。スポーツセンターは、イラクとは思えないほど豪華なもので、敷石は大理石、ビリヤード台や卓球台、スカッシュのコート、ジムナスティックなどが設備されていた。多分、高級将校用の施設なのだろう。

監視は常時3人で、1人は拳銃をもっていたが、あの2人は欧州担当の外交官とイラク航空のスチュワードで、とくに危害を加えられることもなく、比較的和やかな雰囲気だった。たまにだが、クウェートでは全く飲めなかったビールをそっと貰うこともあった。フセイン大統領は、人質（ホステージ）のことを「ゲスト」と呼んでいたが、田代は「これなら“ゲステージ”くらいかね」と監視人を相手に冗談を言った。しかし、内心は、いつ米国の攻撃があるかと不安で一杯だった。

5

10

### 国内での対策

国内では、クウェート事務所長の坪井昭と海外課の栗林勉の二人が中心になって田代の動向を追っていた。ちなみに、海外課は海外事務所の本社窓口の役割を果たしている。

帰国後、坪井は日本人会連絡会に参加し、情報収集にあたった。この会は、クウェートの日本人会会长でM社のI氏を中心に、40～50人から結成され、人質解放まで週2回のペースで会合が開かれた。中にはクウェート駐在員全員が人質になってしまった会社もあり、そこからも人がきていた。

8月15日、第1回目の連絡会がM社の会議室で開かれた。しかし、その時はまだ、誰がクウェート大使館にいるのか正確には分からない状態だった。2回目の連絡会でJALが20作った名簿をもとに、約260人の会社名、家族、子供の名前が初めて確認された。

毎年JALは、夏に臨時便を飛ばす関係からクウェートの在留邦人の家族調査をする。そのため、いち早く名簿をまとめることができたのだ。

坪井が日本人会連絡会を通じて田代の動きを追う一方、栗林は、社内を中心に動いていた。社内では、連絡網が確認されただけで、人質解放のための対策本部のようなものはとくに組織されず、通常業務の指示系統があるだけだった。

「マスコミの方が『おたくは対策本部がないのか』と不思議そうに聞くから『強いて言えば私ですが』と応てました。これは持論ですが、一般的な災害と違って、こういう事件はあまり組織だって大袈裟にやらない方がいいんです。縦横の連絡網さえ、しっかりしていればいいと思う」と栗林は説明する。

30

状況が切迫したのは、在クウェート大使館がいよいよ危なくなり、バグダッドへ移るときからだった。

16日の夕方、海外課長の細川強と栗林は、外務省の「領事移住部邦人保護課」に呼ばれた。本省のホールには、40数社から人が来ており、領事移住部長から現状報告があった後、「バグダッド経由でアンマンへ移動することになった。会社の指示があれば、クウェート

35

大使館の地下室にいる本人に伝えます」と通知があった。

細川たちは、田代の無事を確認して一応安堵しながらも、突然、決断を迫られ困惑した。

そして、「本社としては行くべき」と結論づけた。

「イラクに強いM商事さんが、田代家族がバグダッドへ行ったら、お世話しますと言って下さった。クウェート大使館へのテレックスにそのことを載せてもらったんです」と細川 5 は言う。

しかし、テレックスが着いたときは、すでに田代が出た後だった。田代は自らイラク行きを決めていた。

「大多数の人がバグダッド行きに難色を示すなかで、彼は大勢に流されないで、極めて冷静に判断していましたね」と坪井は後輩のとった行動を評価する。 10

8月28日、海外部長出光昭は、社長からイラク石油相とSOMO総裁に宛てた1通のテレックスを送ることにした。

「8月22日以来、わが社の駐在員を含め100人以上の日本人がバグダッドに止まることを余儀なくされています。彼ら日本人は、貴国と日本とのビジネスや文化交流の面で、深い関係を築き上げ、かつ発展させることに腐心してきた人たちです。彼らが早急に日本に帰 15 国できることを強く望みます」という内容で、そこに田代の個人名はなかった。

このテレックスについて、海外部次長の伊関哲男はこう述懐する。「社長にお願いして、タイミングを見計らって送ることになりました。内容については、送信相手の立場が悪くならないよう、細心の注意をはらっています。結果的には、これが田代の早期解放に繋がったと思います」 20

すぐに先方から、「1日も早い解決を望んでいる。すでに一生懸命やっている」という返事があった。後から考えると、この返信の文末の一行が、田代の早期解放のサインだった。

## 中東室の活動

25

一時帰国を余儀なくされた中東事務所長の和田恒彦以下8名は、取りあえず海外部の応接室を仮事務所とし、田代の救出活動と通常のオペレーション業務にあたった。

「最初は、いつアブダビに戻れるか、まったく分からぬ状況で、2、3週間経ってから総務にお願いして、そこを中東室にしてもらったのです」と和田は言う。

イラク、クウェートからの供給停止分について、侵攻直後に8月分と9月分の1部は、 30 スポット市場で手配した。

中東室では、原油課と外航課との連携のもと、10月から12月の第4・4半期の契約をどうするかが、焦点になっていた。イラク、クウェートから輸入していた原油をどこかで補填しなければならない。

まず、最初の交渉先はイランだった。2日の侵攻後、かなり早期の段階で文書による交 35

渉が開始されていた。

わが国のイランからの原油輸入量は、第3・4半期（7～9月）で日量22～3万バレル、これが第4・4半期（10～12月）では、70万バレルに増量された。ほとんどの元売りが直接あるいは商社経由で数量を増やす中、出光も倍増した。

サウジアラビアについては、出光はすでに侵攻前から増量の話し合いに入っていた。サ 5  
ウジアラビアと出光は90年1月からDD契約を結んでおり、9月から倍増を申し出て、それが月末に正式決定した。

「サウジアラビアとイランの増量、さらに10月以降は、ADNOC（UAEのアブダビ国営石油会社）がわれわれのリクエストに応え追加供給してくれたので、イラク、クウェート分の穴は、大体カバーすることが出来ました。これで供給面での心配はなくなった」と 10  
和田は説明する。

供給面の不安は解消されたが、原油価格の高騰により、国内製品価格への転嫁が問題となつた。

#### 女性と子供の解放

8月28日、イラクがクウェートを19番目の州とすることを宣言。同日、フセイン大統領と人質とのインタビューがあり、英國軍人の夫人も朝から連れ出された。その日の夜にテレビでインタビューの模様が放映され、田代は他の日本人が無事でいることを確認した。また、このインタビューで、女性や子供を楯にとるのは卑怯だという非難が世界的に上がり始めたためか、突然、女性と子供の解放が決定した。翌29日の朝、田代家族のもとに監視人がやってきて、「30分で支度をしなさい」と言う。田代は、家族の荷物を整え、会社宛のメッセージを夫人に託した。そして、二人の子供に宛てた手紙を書き、「もし俺に何かあったときは、これを子供たちに」と言って夫人に渡した。

そこには、書きなぐりの文字でこうあった。

15

20

25

#### 光洋、豊輝

君たちの名前は、パパが一生懸命考えた名前です。名前のように光り輝く心のひろい豊かな人間になって下さい。君たちはきっと立派な大人になって、世の中の人ためになれるとしてパパは期待しています。

ママを大切に。どんな苦しい時も頑張るんだぞ。

30

1990.8.29

田代安彦パパより

また会える日を楽しみにしています。

最後の1行は、夫人がどうしても泣きながら訴えたため、書き加えられたものだった。35

家族を送り出した田代は、これからは男一人だから、何とかなる、と心から安堵した。

しかし、人の思いはそれぞれで、家族と離れた英國軍人の落胆ぶりは激しく、田代は新たに人質として連れてこられたA T & T（米国電話電信会社）社員の米国人と手作りドミノをしながら、彼の慰め役に回った。また、新婚夫人と老齢の神父夫人は、女性だけの解放を拒否して夫婦で残った。

5

田代がバグダッド市内で見たイラクの状況は、イラン・イラク戦争時に出張で見た状態よりもかなり良くなっており、経済制裁がきくには半年はかかると思った。田代は、長期戦を覚悟し、「ネイティブな英語を学ぶにはいい機会」と開き直って自らを励ました。

田代は、ホテルから連行されてくるときに隠し持つて来た携帯ラジオで、1日3回、「ラジオジャパン」を誰にも見つからないように部屋の隅で聞いていた。そして彼は、解放されるはずの女性と子供が先のマンスールメリアホテルに足止めされていることを知った。

10

### 一人だけの解放

8月30日、日本政府が中東貢献策として10億ドルの支援を決定した。田代は、ラジオジャパンでこのニュースを聞き、いっそう不安になった。解放されるはずの家族がまだバグダッド市内に足止めされているのだ。おかげで、30、31日の両日は、心配で全く食欲がなかった。

15

9月1日、田代は朝食後のニュースで、日航機がアンマンに来ており、今日、女性と子供が解放されることを知った。喜んでいるところへ監視人がやってきて、「すぐに、5分で支度しなさい。日本人男性も全員解放だ」と田代に告げた。

20

急いで他の人質に別れを告げ、田代はいつもの目隠しマイクロバスに乗って、再びマンスールメリアホテルに向かった。

ホテルに着くと、玄関先にSOMOのS氏が、外交官ナンバーの2トントラックで迎えに来ていた。

25

S氏は「遅くなつて悪かった。お前がどこに行ったか分からなかつたんだ。今行けば、奥さんと子供の乗る飛行機に間に合う。急ごう」と言って、パスポートを返してくれた。

田代は、日本人男性の解放が自分一人だけということを、このとき知った。

田代がトラックに乗り込もうとしたら、ホテルの監視をしていた情報省の人間が「なぜこいつを連れていくのか」と、怒ったようにS氏に詰め寄ってきた。しかし、S氏が手紙の大書類を見せて何か言うと、相手は敬礼をして離れていった。

30

田代が「それは何」と聞くと、

「大統領の許可証だよ、『彼』に嘆願書を書いて貰つた」とS氏は笑つて応えた。

“彼”とは、7月OPEC総会で、田代に「イラク軍の展開は単なるプロパガンダだ。心配するな」と言ったSOMOの高官だ。

35

田代を乗せたトラックは、猛スピードで市内を走り抜け、サダメ国際空港へ到着した。

空港では、丁度、女性と子供が荷物を抱えてチェックインするところで、田代は3日ぶりに家族と再会した。S氏は、田代のパスポートを持って担当官のところへ行き、VIPなみにチェックを容易にしてくれた。

田代は、空港からSOMOの高官にお礼の電話を入れた。彼は「こんな状態なので、解放が遅れてしまなかった。出光社長以下に宜しく伝えて欲しい」と受話器の向こうで言った。

クウェート事務所のイラク人運転手ハッサンにも連絡をとりたかったが、彼がいるバスラには繋がらず、S氏にハッサンの電話番号を教え、自分が解放されたことを伝えて欲しいと頼んだ。

「日本に帰ったら、どうして男では私だけ解放されたか必ず聞かれるが、どう答えたらいか」と、田代はS氏に質問した。

もし、解放にSOMOが係わっていることが表面化すれば、関係者に迷惑がかかるかもしれない。

しかし、S氏は「SOMOと出光のグッドリレーション・シップでいいじゃないか」と笑って答えた。

「マスコミにそう言っていいのか」と念を押すと、  
「いいとも」という返事だった。

そして、「俺の娘たちは、7歳と5歳と3歳なんだ。今度来るときは、バービー人形を頼むよ」と言って、温かく見送ってくれた。

空港は、この日解放された日本人や、欧州人家族でごった返していた。中には緊張がとけ、貧血で倒れる英国人女性も出た。日本人の人質69人を乗せたイラク航空機は、出発が数時間遅れ、午後9時15分、ヨルダンのアンマンに向けようやく飛び立った。

しかし、飛行機がイラクへ引き返してしまうかも知れないと、全員がまだ、解放に半信半疑だった。機内で、スチュワーデスが洋酒や香水の土産を、人質相手に売り回っているのが、なんとも不思議な光景だった。

試しに田代がイラクディナールを見せて、「これでいいか」と聞くと、「紙と同じだから駄目だ。ドルなら売る」と言う。さすがに買う人は、一人もいなかった。

田代は、ヨルダンとの時差を考え、腕時計の針を1時間戻した。9時35分、飛行機は無事、アンマンのクィーンアリア国際空港に到着した。ここまでくれば、もう後戻りはない。エンジンが止まると同時に歓声が上がった。田代たちはタラップを降り、空港バスで、待機する日航機へと向かった。

## 再会

日航機が横付けされた空港の待合室では、クウェート事務所長の坪井明が人質を乗せた

5

10

15

20

25

30

イラク航空機を首を長くして待っていた。坪井は田代夫人と2人の子供を迎えていたのだ。彼は、この日（9月1日）の早朝、17時間かけて夕空のアンマンに到着した。彼が空港の待合室にいたところ、M商事のヨルダン駐在員がきて、思いがけぬ朗報を告げた。

「救出リストの中に、病人で“ミスター”田代の名前が入っていますよ」

坪井は、この話を信じていいものか、「この目で見るまでは聞かなかったことにしますよ」と応え、なるべく平静を保とうとした。

「田代は、感情豊かな男だから、もしかしたらイラク兵といざこざでも起こして、大怪我をしたのではないか」と坪井は心配だった。

日本人の人質を乗せたイラク航空機が予定を大幅に遅れてようやく到着した。坪井のいる所から、暗闇の中、タラップを降りバスに乗り込む大勢の人影がかすかに見えた。日航機に向かったバスは、ゆっくりと、坪井の眼前を通り過ぎて止まった。

坪井は、バスの窓に懐かしい田代の顔を見つけた。人質の体験を物語るかのように、彼は頭を刈り上げ、G Iカットになっていた。坪井は、バスに駆け寄り、降りてきた田代家族と抱き合って再会を祝した。

田代は思ったよりも元気そうだった。夫人は髪を引詰め、子供たちの顔や手は虫に噛まれた跡が痛々しかった。

「お前、どこも悪くないのか」

「ええ、元気ですよ。でもどうして」

「病人という話だったので心配したんだ。とにかく、何もなくて良かった」

坪井は、夫人の実家から預かってきた着替えを渡した。もちろん、田代の分は入っていなかったが、それも嬉しい誤算だった。

それから1時間後、日航特別機は、アンマンを飛び立った。解放された女性たちは、一刻も早い帰国を望み、市内に確保したホテルをキャンセルしての出発だった。

## 帰国

25

田代たちが乗った日航特別機は、日本を出発する前日まで政府の救援機ではなく、日本人人会の関係企業のチャーター便で飛ぶことになっていた。その場合は、運賃は利用者負担で、大人24万円、子供12万円と料金まで決まっていた。救援機を出すかどうか、その名目と費用負担で政府部内の意見が割れ、結論が出なかったのだ。日航が救援機への変更の連絡を受けたのは出発の6時間前だった。

30

機内では、田代が坪井から、社長がイラク石油相とSOMO総裁に発信したテレックスのコピーを見せてもらっていた。

日本人全員の解放を求めた内容に、田代は「私の名前がないですね」と、ちょっと不満そうに聞いた。

「だから価値があるんだよ。君の名前を入れたら本来の趣旨と違ってくる」と、坪井は答

35

えた。

そう言われて田代は、やがて「なるほど」と納得した。大勢の日本人が捕まっている中で、一個人の解放を要求するわけにはいかない。それに、個人名を挙げれば、田代の処遇は裏目に出で、さらにテレックスを受けた相手に迷惑がかかる恐れもあった。

坪井は、解放された女性の中に、知り合いの商社マンの夫人を見つけた。

5

彼女は、「本当は主人と残りたかったのですけど、子供が小さいから帰ることにしたんです。田代さんを見ていると、夫の顔がダブって見えて仕方ない」と、しんみり言う。

幸い田代家族は全員が解放されたが、まだイラク内には、140人の日本人男性が人質になっているのだ。

外務省の係員が、「田代さん、病気ということで、1週間どこかへ消えて下さい。今は 10 ただでさえ石油業界はマスコミに狙われていますから」と言ってきた。

しかし、田代は「嘘をつくのは嫌ですし、はっきり言える解放の理由もありますから、正直に言わせて下さい」と頼んだ。

機内から外務省に連絡が行き、「病気のための解放ではない」ことを言っても良いことになった。

15

日航特別機は、途中インドのデリーで給油し、日本時間2日午後8時、成田空港に到着した。

空港ロビーは、迎えの家族、会社関係者、それと報道陣でごった返していた。

帰国中の中東事務所長の和田は海外部の栗林らとともに、記者会見を終えて出てくる田代を待っていた。雑踏とライトの熱でロビーは異常な暑さだった。

20

田代の記者会見は、一番最初に設定されていたが、「みなさんにご心配かけて申し訳ない。家族も長旅で疲れているので、話は明日以降にして下さい」ということで、この日は簡単に切り上げた。別の家族のインタビューでは、夫をイラクに人質として残しているため、夫人たちの表情は一様に硬かったのが印象的だった。

記者会見が延々と行われているとき、田代家族が和田たちの前に姿を現した。挨拶もそこそこに、殺到する報道陣から彼らを守るため、栗林は子供を抱きかかえて、出口に向かった。田代も迎え客のような振りをしてその後に続いた。

空港の建物を出て車に乗り込むまでが一苦労で、予約しておいた成田の全日空ホテルに着き、田代家族はようやく落ち着くことができた。ホテルでは、海外部の先輩や同僚、それに懐かしい家族が田代を迎えた。

30

二人の子供が「もうホテルに泊まるのはいやだ」とべそをかいた。この1ヵ月、クウェート大使館の地下室から、イラクでの人質生活でホテルと収容施設を転々としてきたのだから、無理もない。田代は「もう、ここは日本だから何も心配はないよ」と子供たちをなだめた。

翌3日、成田のホテルで一泊した田代は、久しぶりに本社に出社し、社長より労いの言 35

葉を受けた。

午後から共同記者会見が、本社4階会議室で行われた。田代は解放への経緯や人質生活の状況を伝えた。

男性でただ1人解放されたことについては、次長の井元から「出光はSOMOと長年、取引関係があり、SOMOが政府に働きかけてくれたのではないかと思う」と説明があった。5

この日の記者会見は、約1時間で終わり、田代は5日から2週間、会社が用意してくれた荻窪社宅で静養した。

それにしても、日本は平和だった。テレビでは、アニメの「ちびまる子ちゃん」が大ヒットしていた。10

#### 4 原油と製品価格の急騰

##### 海外石油市況

湾岸危機の勃発後、原油価格は上昇を続けた。市況を表す三大銘柄の1つ、ドバイ原油のスポット価格を見ると、イラクのクウェート侵攻以前はバレル17ドル程度だったものが、8月2日の侵攻直後は19ドル台で推移。週明けの6日は23ドル台に上昇し、7日には米軍のサウジ派兵の情報で25ドル35セントへ急騰した。

その後、23日に31ドル98セントの高値をつけたが、29日にはOPEC閣僚監視委員会の360万バレルの増産合意を受け、再び24ドル台に下落した。湾岸危機が長期化の様相を呈する中で、原油価格は緊張度と共に乱高下を繰り返した。20

一方、石油製品市況は原油以上に急騰した。世界的に精製能力が不足する中で、世界の製品輸出の15%を占めていたクウェートが市場から姿を消した影響は大きかった。シンガポールマーケットのジェット燃料（灯油とほぼ同じ性状）を見ても、侵攻当日は前日比3ドル高のバレル27ドルとなり、翌週の7日には36ドル台に跳ね上がった。23日には、サウジのジュベール出し中間留分の9月輸出停止の発表を受けて、46ドル40セントまで上昇したが、月末には40ドル台へとやや鎮静化した。25

原油、製品価格の高騰により、政府がインフレに対する警戒感を強める中、国内製品価格への転嫁時期、幅、方法等について、様々な論議が展開された……。

##### 備蓄の取り崩し

今回は、142日分の備蓄の存在が、供給不安の解消に大いにモノをいった。

142日分の内訳は、8月末時点で民間備蓄が88日分（5,112万キロリットル）、国家備蓄が54日分（3,300万キロリットル）となっている。

さて、湾岸危機による原油高騰で、備蓄を取り崩して価格を安定させるべきだという論35

議が一部閣僚や評論家の間でなされた。

現在、民間に備蓄されている原油の価格はバレル15～6ドルで、これを放出すれば、価格は一時的に沈静化する。

しかし、備蓄は本来、供給不安を解消するのが第一の目的だ。今回は、サウジアラビアやイランなどの産油国が、増産に応じてくれたため、供給の問題は解決し、備蓄を取り崩さずに済んだ。5

また、国家備蓄は、第二次石油危機以後に積み増しされたもので、その価格は現在のスポット価格よりも相当高いものになっている。その払下げは、時価価格で行われるため価格の引下げには全く貢献しない。

ところで、わが国は石油消費国で構成されるIEA (International Energy Agency)に加盟しており、備蓄原油に関しては参加国が協調して融通し合うことになっている。10

この協調放出は、参加国全体、あるいは特定国が7%以上の供給削減を受けた場合、7%の需要抑制措置をとりつつ、供給不足量については、各国の緊急時における備蓄取り崩し要領によって充当するというものだ。

9月27日、米国は供給不安の解消ではなく、価格沈静のため試験的に戦略備蓄を500万バレル放出することに決めた。それに対し、IEAは28日、パリで緊急理事会を開き、供給問題を協議したが、このときは協調放出を見送られた。15

しかし、IEAは、開戦前の1月11日に会議を開き、戦争になった場合の緊急対応計画を検討。17日の開戦直後に、需要抑制の実施を各加盟国に通報した。

それを受けた通産省は、対策本部を作り、石油備蓄法に基づき、民間備蓄義務量を4日分短縮し、1月17日から2月末日まで、民間備蓄から36万バレル/日を取り崩すことになった。これにより、88日分あった民間備蓄は、2月末で84日分となった。20

## 産油国を歴訪

湾岸情勢は、9月に入りヨルダンのフセイン国王やデクエヤル国連事務総長、仏ミッテラン大統領らによる調停工作にも関わらず、一段と緊迫の度を高めていった。25

同月9日、ヘルシンキで行われた米ソ首脳会談で、ソ連はイラクを支援せず、政治的解決を目指すことで合意した。そして、19日、ブッシュ大統領は、平和交渉でイラクが撤退しなければ、経済制裁に変わる次の手段を講じると、武力行使の意思を表明した。フセイン大統領も「クウェートを守るために千年でも戦う」と相変わらず強気の姿勢を崩さなかつた。30

11月8日、ブッシュ大統領は20万人規模の米軍の増派を指示。19日には、国連安全保障理事会が、翌91年1月15日までにクウェートから無条件撤退しなければという条件で、イラクに対する武力行使を容認する決議案を採択した。

この時期、中東事務所長の和田恒彦をはじめとする「中東室」のメンバーは、サウジア35

ラビアの製品輸入の契約更改やU A Eとの原油の契約更改などを海外部と協力してこなしながら、精力的に産油国を回っていた。

9月には、海外部長出光昭がサウジアラビア、アブダビ、オマーンを訪問した。

また、10月には副社長出光裕治と海外部次長の井元明暢がサウジアラビアを訪れている。  
「危機時のお礼と今後の協力をお願いしてきました。戦争がいつ始まるか分からない中での訪問だったので、各国とも心から歓迎してくれました。日本の考え方などを話し、我々の誠意も十分伝わったと思います」と、随行した和田はその成果を語る。 5

中東事務所の中澤啓介や植木聰、ジェッダ事務所の石崎秀樹、加須屋純一なども毎月のようにそれぞれの担当国を訪れている。

「サウジアラビアでは、町のいたるところに『毒ガス警戒』の立て看板が出ていましたが、10あまり緊張は感じませんでした。あのまま何もなければ、事務所を再開することになっていました」（ジェッダ事務所 石崎秀樹）

また、人質から解放された田代も、東京本社で元気に職場に復帰していた。イラクにはまだ多くの日本人が人質として拘束されており、帰国した夫人たちが中心となって「あやめ会」をつくり、夫の解放を求めて政府への陳情や街頭での署名活動を行った。田代も、外務省の聴取を受けた後、あやめ会のメンバーに同行し、海部首相や中曾根元首相へ陳情するなど、イラクに残された人質の解放に尽力した。その中曾根元首相は、11月4日にフセイン大統領と会談し、その結果、74名の人質が解放されることになった。 15

そして、11月下旬になると、田代は再び中東に戻ることになった。

ところで、ブッシュ大統領は、米軍の増派を指示した時点で、すでに武力行使を決意していたと言われている。しかし、圧倒的に不利なイラク軍はいずれ撤退し、武力衝突を避けるだろうとする見方も強くあり、アブダビに入った田代も、このまま何もなければ中東事務所に赴任することになっていた……。 20

## 5 戦争へ突入

25

### 撤退期限切れ

12月上旬、アブダビに滞在中の田代は、イラクの人質がクリスマスまでに全員解放されるというニュースを聞いて喜んだ。

しかし、湾岸情勢は、11月29日に国連安理会が行ったイラクに対する武力行使の容認決議後、一段と緊張の度を増していた。 30

田代は、アブダビに2週間滞在した後、自分の担当するイランに飛んだ。イランの石油関係者の話では、「戦争は避けられない。既にその線で対策を練っている」とのことだった。

「戦争になった場合、ペルシャ湾の外までシャトルサービスをやるとか、国境に近いアバ 35

ダン製油所は閉めるなど、全部対策が出来ていて、実際その通りにやりましたね。政治的にもあらゆる場合を想定していて、さすがに戦争慣れしているというか、しっかりしているなと思いました」と田代は振り返る。

田代は、アブダビ赴任を諦め、年末にイランからそのまま帰国することになった。戦争が始まるケースを想定して、中東事務所全員の一時帰国が決定されたのである。 5

年が明けて1月9日、ジュネーブでイラクのアジズ外相と米国のベーカー国務長官の会談が実現した。しかし、6時間以上に亘る話し合いは、お互いの主張を述べるだけで、失敗に終わった。

同月13日、デクエヤル国連事務総長とフセイン大統領の会談が行われた。撤退期限の48時間前に行われたこの会談に、世界は最後の望みを託したが、事態は変わらなかった。 10

この時点でも、日本人の多くは、戦争への突入を疑っていた。「フセイン大統領は、圧倒的に不利な、何の得にもならない戦争をするわけがない」と思っていたのだ。

海外部では、すでに最悪の事態を想定して手当を行っていたが、戦争の可能性については、やはり意見が割れていた。その中でイラクの担当経験の長い田代は、

「アメリカがフセインの面子を保ってやらない限り、武力衝突は避けられない」と早くから戦争突入を予想していた。 15

1月15日ワシントン時間の深夜、ついに撤退期限切れ。

2日後の17日サウジアラビア時間午前零時、米空軍を中心とする多国籍軍の無数の爆撃機が、砂漠の滑走路から飛び立った。

湾岸危機は、湾岸戦争へとエスカレートした。 20

## ハイテク戦争

1月17日イラク時間午前2時30分、日本時間午前8時30分、米空軍を中心とする多国籍軍のイラク・クウェート爆撃「砂漠のあらし作戦」が開始された。

米軍のハイテク兵器による攻撃に、イラク軍側はなす術がなかった。 25

CNNが伝えるバグダッド空襲の映像は、全世界に届けられ、何億もの人々が現実に行われている生の戦争に見入った。しかし、まるでテレビゲームのように、そこには戦争の悲惨さが欠落していた。空爆を終え帰還した米軍パイロットは「バグダッドはクリスマスツリーのように輝き、素晴らしい花火ショーだった」とテレビに感想を語った。

翌18日、イラク軍の反撃が開始され、イスラエルのテルアビブにスカッドミサイルが撃ち込まれた。 30

フセイン大統領は、湾岸危機の発生直後に、イラクのクウェート撤退と同時にイスラエルの占領地撤退も実現すべきだとするリンクージ（連関）論を展開していた。「戦争になればイスラエルが最初の攻撃対象となる」と宣言していたことを実行に移したのである。

イラクはサウジアラビアのリヤドに向けてミサイルを放ったが、米軍のパトリオット 35

ミサイルによってほとんどが打ち落とされた。

イラク軍の散発的な反撃はあったが、戦況は「最新兵器の実戦テスト場」と言われるほど、多国籍軍の圧倒的な優勢のうちに推移した。

ソ連やフランスによる調停が行われようとしたが、2月10日、イラク側は「いかなる停戦提案も拒否する」と宣言した。しかし15日には突然、イラク革命評議会が「国連安保理決議について話し合う用意がある」と撤退の声明を発表し、これに対して、ブッシュ大統領は「これまでの撤退条件に新たな条件を加えている」として拒否の姿勢を示した。そして、23日正午までに無条件撤退を開始するようイラクに通告。翌24日、ついに地上戦が開始された。5

湾岸戦争について、米国が標榜した「クウェートを救う」「世界経済を守る」という大国の正義は、当然「石油」の確保といった側面を強く持っていた。10

「この戦争は、米系メジャーズがサダムに仕掛けたもの」というまことしやかな憶測も流れ、「もし、サダム・フセインに湾岸の石油を独占されれば、もはや西側世界は独立を維持できなくなってしまう。それだけに西側世界の主宰者アメリカも必死である。中途半端な和平では、その希望が持てない」（瀬木耿太郎著）『湾岸戦争日本はどうなる』ダイヤモンド社刊）といった論評が目を引いた。15

## 52度問題

17日の開戦とともに、一般の見方とは逆に、原油価格は急落した。ドバイ原油のスポット価格は、前日の25ドル30セントから15ドル45セントへ、さらに翌18日には14ドル09セントへと8月2日のイラクのクウェート侵攻以前の水準まで下落した。20

世界の石油市場では、すでに戦争の勃発要因は織り込み済みだった。

「戦争が長期に亘った場合のケースも一応想定はしていましたが、そういうことはないと確信していました。われわれが深刻だったのは、むしろ開戦まででしたね。撤退期限を1月15日にする国連決議が出て、いよいよ1月の積みをどうするか、ものすごく緊張しました」と海外部外航課の平林茂は言う。25

湾岸紛争発生後、タンカーのオペレーションを担当する外航課は出光タンカーの運航課と綿密な連携をとり、毎月危険区域に近いサウジアラビアやカフジのカーゴを、出来るだけ月内の早いタイミングで積み取っていった。契約によって毎月の数量が決まっている以上、極力早く積み取ることが量の確保で一番の安全策という考えである。30

特に撤退期限の1月は、この対応をさらに強化して輸入量を全量確保した。

開戦から数日後、ラスタヌラ港には、もう外国のタンカーが入って来た。しかし、日本のタンカーは、海運業界の労使による協議会の決定で、東経52度以西に入ることができなかった。

ところで、この52度より西に就航しないという決定は日本だけのものであった。英國は35

北緯27度30分以北としていたし、他の国は具体的に港によって、行く、行かないを決めていた。

「サウジアラビアなどからさかんに電話がかかってきて『よそはもう来ているのに、何で日本だけ来れないのか』と相当言われましたよ」と平林は述懐する。

石油各社は、個別あるいは石油連盟を通じて外航労務協会に対し、ペルシャ湾内の就航を再開するように強く要請した。 5

「船員の安全確保はもちろん第一だが、外国船がすでにペルシャ湾に入っている段階で、日本における石油の安定供給を考えた場合どうすべきか」という議論が展開された。

そして、1月31日、全日本海員組合と外航労務協会らが協議し、北緯27度30分以南において東経52度以西への就航が認められた。しかし、日本の各社の船積みが集中したため、10  
スポットの用船価格の高騰に拍車をかけることになった。

「これは他の消費国に迷惑がかかりますから、今後は世界的にレベルを合わせて、迅速な対応をして欲しいですね」と平林は、船舶業界の国際化に望みをつなぐ。

### 環境破壊

湾岸紛争では、環境破壊が大きな問題となった。 15

1月19日、イラク軍は、おそらく敵の上陸を妨害するためにクウェートのミナ・アル・アハマディの原油出荷ターミナルを爆破し、大量の原油をペルシャ湾に流出させた。1月26日、夕方のテレビニュースは、そのことをトップで報じ、世界に衝撃を与えた。

早速、サウジアラビア政府から日本政府に対し、汚染防止用にオイルフェンスを提供して欲しいという申し出があり、政府は石油業界に協力を要請した。2月5日、海上保安庁が保有する約10キロメートルと、石油各社から集まった約20キロメートルのオイルフェンスを積んだ米国貨物機が成田から飛び立った。さらに、2月下旬にはサウジアラビア、カタール、バーレーンの要請を受けて、10キロメートルのオイルフェンスが送られた。 20

また、流出原油の回収についても、サウジアラビアから協力要請があり、国際緊急援助隊が組織された。援助隊は、外務省（海上保安庁）と資源エネルギー庁の混成チームで、出光からは、製造部技術センターの徳田勝八と安全環境室の幅田敏夫が参加した。 25

3月30日夕方、救助隊の第一陣でサウジアラビア入りした徳田は、アラビア湾（ペルシヤ湾のこと）の北部に漂着した原油の回収作業に従事することになった。

作業は、海岸に漂着、あるいは浮遊している原油をスキマー（油除去機）でくみ取り、それを海岸に掘ったオイルピットに溜めていく。ピットは縦80メートル、横10メートル、深さ4メートルもあり、それが幾つか並んでいる。しかし、日本から送られていた16台のオイルスキマーが全く役に立たず、結局手作業に追い込まれた。 30

隣のピットではオランダチームが強力なスクリューポンプ式のオイルスキマーで効果をあげていた。 35

sample

sample

sample

sample

sample

「米国やオランダチームは、ベクトル社との契約で来ているのに対し、なぜ日本はボランティアでやらなければならないのか」とか「油回収の現場仕事なら、石油会社ではなく、建設・土木会社のほうが専門ではないか」という疑問の声が参加メンバーから上がった。

しかし、湾岸戦争における日本の貢献策がうんぬんされていた時でもあり、名誉挽回のためにも回収作業を進める以外になかった。 5

第2陣に参加した幅田は、後日、「油回収に関するレポート」をまとめ、サウジアラビア石油関係者はそれを高く評価していた、とジェッダ事務所は報告してきている。

流出原油はマングローブなどペルシャ湾の生態系に危機を招いたが、それに続くクウェートの油田火災は、深刻な大気汚染をもたらした。

2月24日午前4時（日本時間10時）、米軍を中心とする多国籍軍の地上からの猛攻が開始されると、イラク軍はわずか3日で壊滅状態となった。そして、油田施設を次々と破壊しながら撤退していった。 10

クウェート領内の600ヵ所以上の油井から1日300万～700万バレルと推計される原油が、どす黒い煙を上げて炎上した。大気中にまき散らされる大量の硫黄酸化物と煤塵。陽を遮る黒い雲と黒い雨、気温は例年より8度も下がり、大気汚染による健康への影響が心配された。 15

油田火災の消火は、当初数年かかるだろうと言われた。しかし、予想以上に作業がはかり、8ヵ月後の11月6日にはすべての油田火災が鎮火し、一部油田の操業も再開された。

## 90億ドルの財源

湾岸戦争が勃発してから、わが国の湾岸支援策として、90億ドルの追加支援や難民移送のための自衛隊機派遣などが国会で論議された。 20

90億ドル（約1兆1千900億円）は、国民一人当たりだと約1万円。国民一人ひとりに広く負担を求めるのが主旨だから、消費税や所得税から徴収するのが筋だろう。しかし、消費税は、成立の経緯から増税は不可能だった。 25

支援財源として真先に浮かび上がったのは石油税の増税だった。しかしこれは、日本は石油のために金を出す、ということを内外に公言しているようなものだ。

石油業界は猛烈に反発した。政治の波にもまれ続けた石油関係諸税は、「取りやすいところから取る」方式で増税を重ねてきた。それは、現在でもすでに約4兆円。原油1バレル当たりに換算すると20ドルを越え、本体価格よりも高い。産油国も、増税による需要の落ち込みを警戒し、増税回避を働きかけていた。 30

その後、「石油税を増税するとしても他の税と組み合わせるべき」として、たばこ税を加えることが俎上に登ったが、日米問題や生産農家への影響が微妙に絡むことから、これは潰れた。

結局、財源は石油税を1ℓ当たり1.02円引き上げて3.06円に、法人税を2.5%引き上げ、 35

基礎控除を法人税額 300万円から 400万円に引き上げられることになった。

わが国の湾岸貢献策は、合計 130億ドルもの支援金を出しながら、常に後手に回り、すっかり国際的に評価を落としてしまったが、その中で掃海艇の派遣などは例外だった。

掃海艇は、多国籍軍の強い要請を受けて派遣されることになったが、これは日本の機雷の除去技術が、先の大戦の経験から「世界第1級」との評価を持つからだ。 5

現地で日本人会による掃海艇メンバーの慰労会に参加した中東事務所の和田は、「日本ではあまり報道されていませんが、彼らは今回実に良い仕事をしました。現地での評価は高く、例えばバーレーンの土産物屋でいろんな国の旗を売っていますが、掃海艇が行ってからはそこに日の丸も並ぶようになります、嬉しかったですね」とその働きに敬意を表している。 10

### 中東室の解散

2月27日、多国籍軍はクウェート全土を制圧した。そして、ブッシュ大統領の勝利宣言とともに、軍事作戦が停止された。

3月3日、戦争の完全終結を盛った国連安保理決議案が採択され、湾岸紛争は戦後処理 15 の段階に入った。

中東の三事務所から避難してきた「中東室」もそろそろ解散の時期を迎えていた。

年明けから開戦にかけて中東室のメンバーは、手分けをして国内各地の店主会や製油所を回り、湾岸戦争に関する講演を行った。

日本では戦争突入を疑う論調が支配的だったが、講演では「必ず戦争になる。そして早く 20 期に終わる」ことを主張した。

「フセインが我々の常識を越えて、ジハード（聖戦）を主張している以上、絶対に引くことはない。また、イラク兵は、6割が民兵で、侵攻後半年も経つと、鍛えられた兵隊ではないから士気も落ち、体力的に限界だろう」というのが、彼らの主張の根拠だった。

ジェッダ事務所の石崎秀樹は、札幌の店主会や愛知製油所の講演で次のように語っている。 25

「大胆な言い方だが、自分の中東での生活体験から考えると、いま中東は日本の戦国時代に例えられよう。イラクがクウェートを襲ったのも、例えば織田信長が堺を攻め落として自分の領国にしたようなものと考え、そこで起きる出来事を司馬遼太郎の小説の世界にダラセラるとよく分かる……。」 30

中東室メンバーによる講演は、自らの体験や現地からの生の情報をもとに、マスコミ報道では分からぬ産油国の実情を伝え、石油の安定供給の困難さが理解され、極めて好評だった。

また、中東室では、全員が日本にいる間に「中東の石油と歴史」と題する資料集を作ることにした。 35

この制作意図について和田はこう語っている。「我々は、これまで産油国と経済的な面で関係の強化を図ってきました。しかし、お互い相手を理解するにはそれだけでは足りません。相手の歴史や宗教まで立ち入って、未来への糸口を見つけていこう。そのために、まず中東を理解するためのベースとなるものを、良い機会だからみんなで分担して作ろうということになったのです」

5

この資料集は、3月中にまとめられ、新入社員教育用にも使われることになった。

南から桜の便りが聞こえる3月中旬、中東室のメンバーは、成田空港から中東へ、次々に飛び立って行った。クウェート事務所長の坪井明と田代安彦は、とりあえずアブダビに籍を置き、イラン、クウェートを担当することになった。

しばらくして、田代は、イラクで連絡が取れなくなっていたクウェート事務所の運転手ハッサンの無事を確認し、お互いの無事を電話で祝った。彼は、田代が8月にクウェートを出国した後も、事務所や坪井、田代の住まいが略奪に会うのを少しでも防ごうと、クウェートとイラクのバカラとの間を何度も往復して家財を運び出し保管していた。

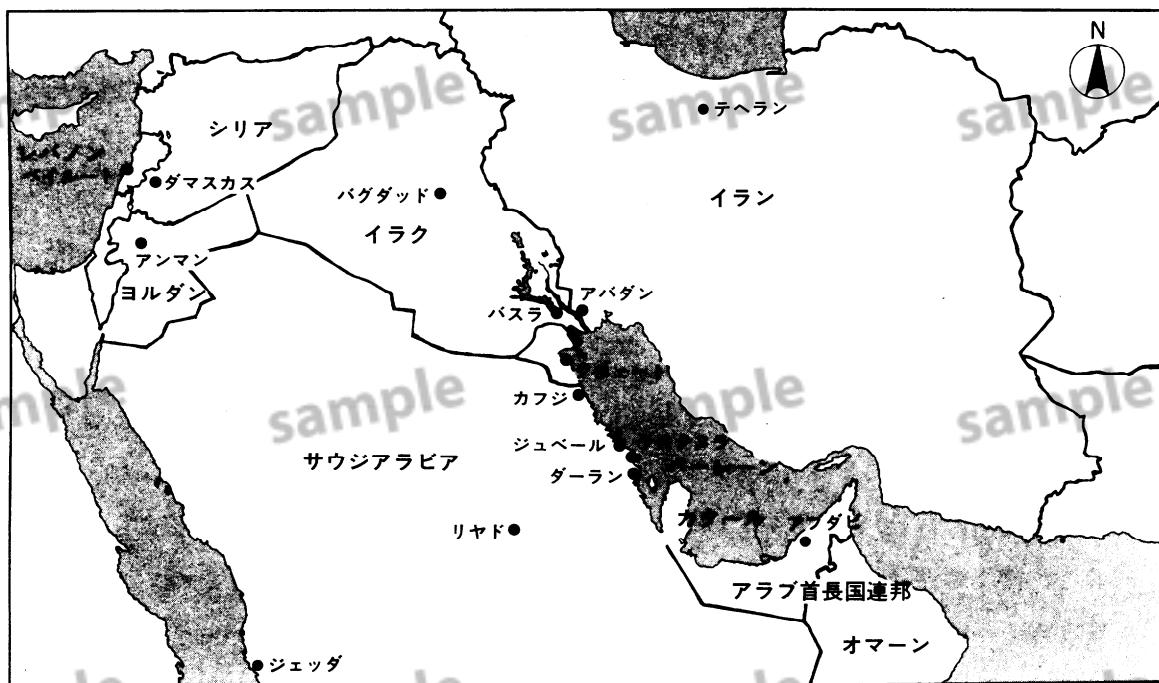
「出光以外では働きたくないからね」と彼は言う。現在、イラク人の彼はクウェートに入国できないが、近い将来、また一緒に働く日が来るだろう。

ハッサンの無事を確認した時点で、出光の湾岸戦争は終わった。

10

15

附図 1



附図 2



## 附録 湾岸日誌

### 海外関係

1990年

8月

- 2 イラクがクウェートに侵攻、武力制圧  
国連安保理、イラク軍のクウェート即時撤退を決議（決議 660号）
- 6 国連安保理、対イラク経済制裁決議案を採択
- 7 米軍、サウジアラビアに進駐
- 8 イラクがクウェート併合を声明
- 9 I E A 緊急理事会開催。緊急対応システムの発動準備着手
- 12 米国、対イラク海上封鎖宣言
- 26 O P E C 石油相協議会開催（～28）
- 29 O P E C 閣僚監視委員会開催
- 31 I E A 緊急理事会開催（パリ）

9月

- 1 デケヤル国連事務総長、アジズ・イラク外相会談、調停交渉不調に終わる
- 3 イラク、対外債務返済を停止
- 9 米ソ首脳会議開催、「イラク問題」に関する共同声明発表（ヘルシンキ）
- 10 イラク外相、ラフサンジャニ・イラン大統領と会談、復交合意
- 24 ロンドン原油市場で10月渡しの北海ブレント原油が42ドル／バレル台に急騰
- 25 国連安保理、イラク空域封鎖を決議
- 28 I E A 理事会、各国は緊急状況に即応するため、効果的な備蓄取り崩しの準備や需要抑制に備えることで合意

10月

- 5 プリマコフ・ソ連特使、フセイン大統領と会談（28日に再会談）
- 8 東エルサレムでイスラエル治安部隊によるパレスチナ人殺傷事件
- 12 国連安保理、イスラエル非難決議採択

### 国内関係

1990年

8月

- 5 対イラク経済制裁の坂本官房長官談話
- 6 石油連盟緊急理事会開催
- 9 外務省、湾岸5ヵ国邦人に退避勧奨
- 9 通産省、イラク及びクウェートを原産地又は船積地域とする全貨物の輸入不承認
- 16 資源エネルギー庁、「当面の石油需給対策について」を発表
- 17 中山外相、中東訪問へ出発
- 29 海部首相「中東に対する平和回復活動に係るわが国の貢献策」を発表（多国籍軍へ10億ドル拠出）

9月

- 2 日本人婦女子ら70人イラクから帰国
- 4 石油製品の値上げ問題をめぐり、閣議で備蓄・在庫評価について論議
- 14 政府「中東貢献策」の第2弾として、多国籍軍に10億ドルの追加支援を決定、周辺国に20億ドルの拠出を発表
- 17 石油元売各社、石油製品卸（仕切）価格の改定を発表（～20日）。これ以後「月毎の価格改定方式」を導入
- 27 海部首相、国連平和協力法案の「考え方」6項目を発表
- 28 通産省、「石油価格の問題と一緒に考えましょう」を発表

10月

- 9 政府、自民党、「国連平和協力法案」の自衛隊の扱いについて最終調整
- 11 資源エネルギー庁、90年度下期の原油処理量を前年比11%増とする旨発表
- 16 衆院本会議で「国連平和協力法案」な

- 14 イラン政府、イラン・イラク両国は正式に復交と発表  
28 イラクのシャラビ石油相解任される  
29 仏・ソ両首脳はアラブ諸国会議の開催を提案

- どを中心に審議開始（11月8日廃案）  
29 省エネルギー・省資源対策推進会議、「当面の省エネルギー対策について」を発表

11月

- 20 アラブ首長国連邦のオタイバ石油相解任される（後任にユスフ氏）  
28 英国第50代首相にメージヤー氏就任  
29 国連安保理、91年1月15日以降の対イラク武力行使容認案を採択  
30 イラク、安保理受入れを拒否  
ブッシュ大統領、米・イラク外相の相互訪問を提議  
30 サウジアラビアのラスタヌラ製油所で火災発生

12月

- 7 イラク国民議会、全人質解放を決議  
11 米・イスラエル首脳会談（ワシントン）  
13 OPEC第88回定期総会、湾岸危機解決までは8月合意の増産体制を継続する旨のコミュニケを採択（ウィーン）

1991年

- 1月  
1 イラク、ムバラク・エジプト大統領の平和提案を拒否  
3 ブッシュ大統領、米・イラク外相会談の開催を提案（4日、イラク側が受諾）  
9 米・イラク外相、ジュネーブで会談  
11 IEA理事会、湾岸開戦の場合、250万バレル／日の供給を図る旨の緊急時協調対応計画に合意（3月6日解除）  
15 国連安保理、仏の調停案を米・英の反対で廃案に  
17 米・英軍、バグダッド空爆開始  
17 カフジのアラビア石油鉱業所が被弾

1991年

- 1月  
17 通産省「湾岸危機対策本部」を設置、当面の対策を決定  
17 通算大臣、民間備蓄義務を4日分軽減する旨各義務者へ通知（82日から78日へ、期限は2月28日）  
18 全日本海員組合、外航労務協会、外航中小船主労務協会は、ペルシャ湾への船舶の航行を東経52度以東に限って認める旨発表  
21 通産省、LPGの供給確保対策を検討  
23 政府、多国籍軍への90億ドルの追加支援を決定。財源を石油税、法人税などの増税で賄う旨を表明

- |  |  |
|--|--|
| 18 イラク軍、イスラエルのテルアビブ、ハイファをミサイル攻撃            | 23 石連、石油税増税に反対を決議  |
| 25 ペルシャ湾に原油が大量流出                           | 31 全日海や船主団体、ペルシャ湾での航行を北緯27度30分以南に拡大。サウジのラスタヌラ港への入港が可能となる |
| 29 ベーカー国務長官とソ連外相、イラクが撤退を約束すれば停戦は可能との共同声明発表 |  |
| 30 カフジで攻防戦、米兵12人戦死                         |  |

2月

- 5 ラフサンジャニ・イラン大統領がイラクに7項目の和平提案
- 15 イラク革命評議会、イスラエルの占領地からの撤退を条件に国連安保理決議660号の受入れを表明
- 21 イラクとソ連、和平に関し「8項目合意」
- 22 ブッシュ大統領、イラク撤退案拒否。国連決議に基づく23日正午までの無条件撤退を要求
- 24 多国籍軍、イラク及びクウェートに侵攻、地上戦に突入
- 26 フセイン大統領、26日中に撤退完了と声明
- 27 ブッシュ大統領、多国籍軍の勝利を宣言し、28日午前零時で戦闘停止と声明

2月

- 9 通産省、民間備蓄の取崩しを2月末で中止することを決定
- 15 政府、支援90億ドルの財源措置を決定（石油増税の半減を決定）

3・4月

- 12 OPEC閣僚監視委員会、1991年第2四半期生産上限2,230万バレル／日等を決定し閉幕（ジュネーブ）
- 26 サウジアラビアとイラン、国交回復
- 29 仏大統領とフセイン・ヨルダン国王、中東和平に関して合意
- 4.7 ジャビル・クウェート首長、92年中に議会選挙を実施することを表明

3・4月

- 8 政府調査団（ペルシャ湾流出原油防除・環境汚染対策調査団）出発（19日帰国）
- 13 通産省、4月より導入される石油臨時特別税の転嫁対策を纏めるとともに、行動基準を通達
- 30 第一次湾岸流出油回収専門家派遣（～4月28日）
- 4/1 「石油臨時特別税」施行（～92年3月31日）

sample

sample

sample

sample

sam

不許複製

慶應義塾大学ビジネス・スクール

Contents Works Inc.